日本中国友好協会『日中友好新聞』2024 年 5 月 1 日

第９回　若く帰国した二世たち：「私たちは何人(なにじん)ですか」

前回、残留日本人の二世の日本での生活が、極めて多様だと述べました。

今回は、主に１９９０年以前に、２０歳未満で日本に帰国した二世（以下、若年帰国者）の特徴を紹介します。

若年帰国者の多くは残留孤児の二世で、一世と一緒に政府国費で帰国しました。現在、３０歳代～５０歳前後で、人数は二世全体の約２割と推定されます。

若年帰国者の生活は、二世の中では比較的、安定しています。

帰国直後、短期間ですが公的な日本語教育を受け、１５歳以下だった人は日本の小中学校に編入学しました。一部ですが、大学・大学院に進学した人もいます。日本語会話には不自由が少なく、日本国籍に帰化した人が多いです。

中国語や各種資格を生かし、貿易や通訳、専門職・技能工・事務職などで正社員になった人も少なくありません。日本語と中国語のバイリンガルで、多文化共生活動のリーダーを務める人もいます。

しかし、こうした若年帰国者も、同世代の日本生まれの日本人と比べれば、大きなハンディを抱えています。

多くが、日本の学校で「中国に帰れ!」といった「いじめ」にあい、日本語での勉強・進学には特別の苦労をしました。１６歳以上で帰国した人は、高校入学・進学も困難でした。若年帰国者の約４割は、最終学歴が中学卒です。

非正規雇用で働いた人も、約８割に達します。最初は正社員で就職しても、文化・価値観の違い、倒産などに遭遇し、非正規雇用に転職した人が多いです。半数弱は夫婦共働きの世帯月収が２５万円以下で、「経済的に苦しい」と感じています。日本語の読み書きに困る人も、約半数を占めます。

若年帰国者の多くは、日本での生活が長いので差別された経験が多く、その一方、中国人との間でも文化の違い・違和感を感じ、「私はいったい何人(なにじん)なのか」といった心理的葛藤を抱えています。日本で結婚相手を見つけるのも難しく、中国に戻って見合い結婚をした人が多いです。

総じて若年帰国者は、日本・中国の複数の文化をもちながら、それを十分に生かせず、疎外感に悩んできた人が多いといえましょう。